

# 鹿児島医セン

鹿児島医療センター(心臓病・脳卒中・がん専門施設)

2021.1

vol.177



新年明けまして  
おめでとうございます。

院長 田中 康博

新年明けましておめでとうございます。今年も地域医療に貢献するとともに鹿児島県の医療向上のために尽力したいと思います。宜しくお願いいたします。

昨年は新型コロナウイルス感染症流行のため、日本中、世界中がパニック状態に陥ってしまいました。新型コロナウイルス感染一色で終わった感じがします。当院も当初から新型コロナ感染症には関わってきましたが、10月、11月は通常診療に軸足を置いた医療をさせてもらいました。12月からはコロナ感染症の爆発的増加に伴い、再度受入れを再開しています。長期化するコロナ対策の一つとして通常診療の維持も重要で、従来の機能を維持しながらコロナ感染症患者受入れを行うというかなり厳しい運用をせざるを得ません。また、医療崩壊が懸念される関西へのスタッフ派遣も行ってきました。新型コロナウイルス感染症対策の柱は重症化、死亡を減らすこと、医療崩壊を防ぐことで今後とも鹿児島県のみならず、全国の状況も踏まえながら応援支援を行うつもりです。

コロナ禍で医療に対する考え方や行動様式が変わるきっかけにもなりました。当院も感染予防に留意しながらの急患対応、入院患者の感染症対策、職員の感染に対する意識向上など明らかに変わってきました。この経験はコロナ禍後も充分活かせると思っています。一部リモート診療も始まりましたが、一般的な診療になるにはもう少し時間がかかりそうです。私たちはどのような状況においても救急医療や高度医療を維持し、鹿児島の住民の方々の方々の健康を守る一翼が担えたら幸いです。何はともあれ、新型コロナウイルス感染症が終息し、通常の日常を取り戻したいものです。

コロナ感染症流行前より地域医療構想が話題になっていました。最近まで鹿児島県の人口が減少するも鹿児島市は増加傾向を示していましたが、ついに鹿児島市の人口もピークを過ぎたようです。このことを踏まえながら2030年、あるいは2040年の医療の形を考えなくてはなりません。全国的には鹿児島県はベッド数が多い地域と言われていますが、有床診療所や病院の縮小・閉院でベッドが減少に転じる可能性もあります。今後の鹿児島の医療システムをどう作り上げるか喫緊の課題です。鹿児島県の医療行政、鹿児島大学、公的病院、医師会の皆さんとよく検討をし、素晴らしいシステムを作らなくてはなりません。医療側にも高度医療、さらにチーム医療、大がかりな設備や装置、安心、安全な医療行為など様々な改善すべき要因があります。難問ですが、今まで行っていた医療システムを180度変えるぐらいのドラスティックな構造改革が必要になるかもしれません。後世が困る事のない医療システムの基礎を構築し、次の世代が良いシステムを完成させることを願っています。まずは「今助けられる命を助ける」本来の仕事で第一としながら未来に繋ぐシステム作りも行っていきたいものです。



# 幹部年賀状



副院長  
中島 均

明けましておめでとうございます。

昨年はコロナで始まりコロナで終わったような一年でした。今年はコロナとの戦いで、一番の話題は待ちに待ったワクチンの使用がいよいよ国内でも使用可能となる事であると思います。勿論ワクチンですので、副反応、接種後の感染予防期間の問題さらにはワクチンそのものの保管や具体的な接種方法などなど、解決すべきことは山とあると思います。それでも有効な治療法であることには間違い無いと思います。各地で医療崩壊が危惧される中、医療界は今までにない危機的状況ではありますが、もともと病を抱えた人のため、他人のために自己犠牲を厭わない集まりでこれほど一つの目的に集中できる集団は他にどこにも無いと思います。この医療界のそこ力を発揮してなんとかコロナとの戦いに打ち克っていきたいものと思っています。今年も何卒よろしくお願い致します。最後に皆様のご多幸をお祈りして新年のご挨拶とさせていただきます。



統括診療部長  
松崎 勉

明けましておめでとうございます。

昨年も、がん診療連携、緩和ケア連携等、当院がん診療部門におきまして、大変お世話になり有難うございました。コロナ禍の中で直接面談の制限などもあり、がん市民公開講座はWEB上での公開としました。また、連携会議や研修会なども開催できず十分な連携が図れなかったのではないかと考えております。本年は、少しでも明るい方向へ進めることを期待し、引き続き更なるご指導の程宜しくお願い申し上げます。

がん診療部門においては、医用工学の進歩による手術手技や放射線治療への応用、分子標的薬や免疫チェックポイント阻害薬などがん薬物療法の進歩で、生存率の向上、生存期間の延長、治療後のQOLの改善等が認められております。当院でも標準的治療や最新の治療が提供できる体制を更に進めていかなければならないかと思えます。また、多職種による支持療法の充実、緩和ケアの薬物療法でもガイドラインの改訂等あり時代に即した提供体制、その人の価値観を大事にし、自己決定を支援しながら治療を考える、“アドバンス・ケア・プランニング”の更なる推進が求められているかと思えます。

当院も地域がん診療連携拠点病院として、がん診療の充実を図りながら、地域の皆様の期待に応えられるよう連携の強化に取り組んで、課題の解決と笑顔に出会える年になるよう取り組んでいきたいと思えます。

本年も、どうぞ宜しくお願い致します。



臨床研究部長  
城ヶ崎 倫久

明けましておめでとうございます。

国立病院機構の病院の診療事業は、原則として診療収入(医業収益)の自己収入によって賄っており、国からの税金の補填はありません。その逆に、職員の基礎年金の半分の長期公経済負担金を国に納めていました。その一方で、国立病院機構の臨床研究部には運営費交付金が研究費として交付されてきました。ところが、昨年国会で長期公経済負担金が廃止されることが決まり、それに伴って運営費交付金も4月から停止することになりました。臨床研究部は鹿児島大学大学院医歯学総合研究科の連携大学院になっており、学位が取れる研究部です。これまで5人の先生方の医学博士誕生のお手伝いをしてきました。研究にはお金がかかります。運営費交付金は当院において、医学博士の輩出に大きく役立ちました。「学位は取らないと気持ちが悪いがとっても食えない足の裏についた米粒」と揶揄されますが、医療者としての人生の一時期に医学研究に没頭した証になると思えます。鹿児島医療センター臨床研究部に根付いてきた研究の灯を消さないように、当院では意欲のある大学院生を募集しています。

今年もよろしくお願い致します。





メディカルサポート  
センター長 兼  
地域医療連携室室長

**蘭田 正浩**

新年あけましておめでとうございます。

昨年は、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)で、病院訪問もできず、ご挨拶もしないまま過ぎてしまい、大変失礼をいたしました。講演会や学会等は軒並み中止となり、これまでの日常が激変し、人と直接対面することの必要性を改めて痛感させられた一年でした。最近では、オンラインを活かした講演会や会議がなされ、少しずつですが慣れてきました。しかしながら、もうしばらくは、この感染症とつき合っていかなければなりません。これまでの経験を踏まえた治療や新しい治療、ワクチン等に期待したいと思います。

現在医療は細分化・高度化していますが、単一の医療機関ですべてを完結させることは不可能であり、今後ますます地域の診療所・医院(かかりつけ医)および地域中核病院との連携が不可欠であります。

メディカルサポートセンターでは、これからも、地域医療連携、入退院支援、がん相談支援を3本柱として、日々改善を目指して、職員が一丸となって取り組んでまいりますので、本年もどうぞよろしくお願いいたします。



事務部長

**河野 完治**

新年明けましておめでとうございます。

昨年はコロナ禍の中、市民公開講座・出張研修・各学会等全てと言っていいほど延期、中止、又はテレビ会議での開催となりました。新しい生活様式、新しいコミュニケーションツールの導入により令和2年は予想した未来とは違う方向で時代が一気に進んだような気がします。個人的には丸々1年間、休日も外出を控え院内宿舎に引きこもり?状態となり、笑顔すら少なくなっていたように思います。

そんな中、「令和2年7月豪雨」災害支援要請において、当院DMATは速やかに参集し、出勤体制を整えられました。当院の公用車で出発するリーダーの田中先生をはじめメンバーの方々が遅く、誇らしく輝いて見えたのが記憶に新しいところです。災害は無いに越したことはありませんが、地球温暖化に伴い経験したことがないどんな災害が襲ってくるかわかりません。互助・共助の精神を強く養わなければならないと再認識致しました。

さて新年を迎え、さまざまな外部環境が変わる中、またコロナ禍の非常に難しい状況ではありますが、2020年診療報酬改定の基本方針であります健康寿命の延伸、人生100年時代に向けた「全世代型社会保障」の実現、患者・国民に身近な医療の実現、どこに住んでも適切な医療を安心して受けられる社会の実現、医師等の働き方改革の推進等を踏まえ、また機構本部主導の「2040年においても現医療体制を維持するためのSUREプロジェクト」、地域医療構想の波にも耐えるべく、勤務時間管理、医療現場の方々と一緒に考える病床利用率・病床回転率向上や新入院患者数の確保等地域医療連携室等関係各所と協力しながら、内外への情報発信に尽力して参りたいと思います。

本年も何卒よろしくお願いいたします。



看護部長

**村田 淳子**

新年あけましておめでとうございます。

2020年は、「新型コロナウイルス感染症」に翻弄された1年でした。私達医療従事者にとっては、新型コロナウイルスに対応する医療体制の確立と一般医療の両立という難しい課題に向き合った1年でした。当院でも同じくこの課題と向き合いながら新年を迎えました。振り返るとコロナをきっかけにこれまでにない程の医療従事者への感謝の言葉が多く聞かれ、最前線に立って働く看護師たちの姿が大きくクローズアップされた年でもありました。また、2020年の新しい生活様式の中には、ウェブでの研修・学会など場所や時間を選ばない方法が取り入れられ、多様な働き方の看護師に適したスタイルだという新しい発見もありました。

2021年は、丑年です。丑年は諸説ありますが、「我慢(耐える)」「発展の前ぶれ(芽が出る)」を表す年になると言われています。コロナが終息する日まで自分たちにできることを着実にやり、やるべきことを見失わず、これからも「安全・安心」な医療の提供に努めて参りたいと思います。

今年もどうぞよろしくお願いいたします。



第51回

# 桜島火山爆発 総合防災訓練

(住民避難訓練)

## 参加の報告

2020年11月14日に県と市が主催した桜島火山爆発総合防災訓練（住民避難訓練）にDMATのプレーヤーとして参加しました。今回参加した当院DMATは医師1人、看護師2人、ロジスティック2人の5人で参加しました。今回の訓練は島内住民並びに防災機関として鹿児島県庁、鹿児島市役所、消防、警察、陸上自衛隊（陸自）、海上自衛隊（海自）、海上保安庁（海保）が参加しての大規模な訓練でした。主な訓練内容は以下の4つでした（図参照）。

- ①町内会と地元消防団による住民自体の自主避難訓練
- ②避難促進施設（病院や老健施設など）の避難訓練
- ③避難用バスの確保からバス避難までのプロセスを実際に行う訓練
- ④関係機関による避難支援及び残留者の捜索

我々がDMATとして参加したのは、②と④の訓練でした。老健施設や傷病者で避難困難な住民をDMATの車両で直接搬送避難させるパターンや、海自や海保のヘリにドッキングして搬送避難させるパターンなどを実際の車両とヘリを用いてシュミレーションしました。さらに貴重な経験だったのは、当院DMAT隊員5人のうち2人はDMAT本部機能の中の消防からの情報収集とDMATとの連携を支援する部門での訓練に振り分けられたことです。DMATの実働ではなく本部機能を経験したことにより、各部門やDMAT内部との連携のノウハウの概要が理解できたのは収穫だったと思います。また、近年のITの進歩により、現場ではIP無線からの頻回な肉声による情報、LINEオープンチャット（スマホ）からの頻回な文章での情報、EMIS（広域災害医療情報システム：スマホ）からの情報の3つの情報ソースが本部では入り乱れており、豊富な情報が逆に情報過多となり現場が混乱する場面も見受けられました。今後情報の種類による伝達手段のすみわけの必要性を感じました。人数が少なく経験も浅い当院DMATにとって今回の訓練は非常に貴重で有益なものでした。今後も様々な訓練を通して経験値を高め、実際の不測の事態に対応できるDMATを作り上げていきたいと思ひます。

（文責：救急科部長 田中 秀樹）

噴火警戒レベル5（全島）における避難指示発令段階の残留者捜索要領



# 第27回 「愛祈祭」を開催して



第27回は“Shining Road～ここから始まる新しい未来～”というテーマで開催しました。しかし、今年は新型コロナウイルス感染症の影響で、日常生活が一変し、愛祈祭の準備をどのように進めればよいのか悩みました。その一方で、様々な困難に、ひるまずに立ち向かい誰かのために何かをしようという努力が、明るい未来につながるのではないかと考えました。そして医療従事者になる者として、誰かのために役に立つ存在となり翔いていきたいという思いにも、つながると思いました。そのため、中止するという選択もありましたが、感染対策を行いながら、これまでになかった新しい愛祈祭になるように挑戦しました。具体的な企画としては、新型コロナウイルス感染症に関する情報を提供する学習発表会や、災害時に役立つ情報を提供する学習展示などです。例年行っている合唱や個人発表などの舞台発表、健康チェック、喫茶コーナーは、規模を縮小しつつも、感染対策につとめながら実施しました。また、恒例となっている愛祈祭前日の地域清掃も、地域の方々への感謝をこめて行いました。さらに、特別企画として、3密をさけつつ学生同士の交流を深めることを目的に、リモートを活用した全員参加のレクリエーションなども企画しました。今年は、全学年が交流する学校行事が全て中止になっていたため、学生全員が楽しんで参加することができたと思います。



このような新しい愛祈祭の企画・運営を通して、学年を超えた交流を行うことができ、協力して一つのことに取り組んでいくことの大切さを学ぶことができたと思います。これから、1・2年生は実習や授業、3年生は国家試験など、それぞれの学年で達成しなければならない課題があります。そのため、今回学生全員で作上げた愛祈祭での経験を活かして、協力して達成していきたいと思います。

(第27回愛祈祭 実行委員長2年 下鶴 美寿珠・副実行委員長2年 山下 千里)





# 国際大学との包括連携協定

学校法人 津曲学園鹿児島国際大学との  
看護学部設立・運営に関する包括連携協定書締結にかかる調印式について



去る11月27日（金）15時30分より、当院において学校法人津曲学園鹿児島国際大学との看護学部設立・運営に関する包括連携協定書の調印式が行われました。

これは、昨年8月「独立行政法人国立病院機構鹿児島医療センター敷地内における看護大学の設置・運営事業」を公募型企画競争として公告し、10月下旬、学校法人津曲学園を実施事業者として決定。鹿児島医療センターと学校法人津曲学園鹿児島国際大学が、鹿児島医療センター附属鹿児島看護学校の敷地を活用して看護学部設置に向けて文部科学省への学部設置認可申請等の準備を円滑に進めていくことを目的としたものです。

田中院長兼看護学校長は、「昭和21年に設立され、統合等により1学年120名の大型校時代を経て、約6,000人の優秀な卒業生を輩出してきた歴史ある鹿児島医療センター附属鹿児島看護学校を閉校することは大変悲しいことではありますが、複雑化・高度化する医療に適応するためには、臨床現場での教育を一層重視した4年間の看護基礎教育課程、及びチーム医療・地域医療を担う人間力を備えた有能な人材を育成するため、特に医療を担う人々の臨床現場の教育ニーズを受け止め、高度専門職業人の生涯教育の場として鹿児島県内において看護系大学が必要。是非本学の教育方針を引き継いで頂き、優秀な看護職の輩出をお願いしたい。」とご挨拶されました。

コロナ禍において握手こそ出来ませんでしたが、当院田中院長兼看護学校長と鹿児島国際大学長は、それぞれの人的・知的資源、機能及び施設整備等教育環境の活用を図りながら、看護職育成に係る教育・研究における交流及び連携を推進し、相互の教育・研究の一層の進展と地域社会の発展に寄与することを約束し、看護学部設立・運営に関する包括連携協定書調印式を終えました。

（文責：事務部長 河野 完治）

■お問い合わせ先

独立行政法人  
国立病院機構

**鹿児島医療センター**（心臓病・脳卒中・がん専門施設）

〒892-0853 鹿児島市城山町8番1号

（代）TEL 099(223)1151 FAX 099(226)9246 <https://kagomc.hosp.go.jp/>

【地域連携】 蘭田・西田・西辻・篠崎・迫田・椎原・出口・吉留・櫻木・田辺・山之内・吉村

【がん相談】 松崎・新川・水元・原田・菊永・杉本

地域連携室専用 FAX▶099(223)1177

※休日・時間外は当直者で対応します。

